

●……もくじ……●

第1章

夢の始まり

5

第2章

久仁木村へ

37

第3章

地域協力隊

67

第4章

村の人々

91

第5章

心の雲

125

第6章

久仁木村の夏

161

第7章

花懸け祭り

197

あとがき

210

全日本ろうあ連盟のあゆみ

215

咲<sup>え</sup>む……「笑う」という言葉の古語の語源となる言葉。

笑い顔になる、花が咲<sup>き</sup>始め

つぼみがほころびる、果実が熟するという二つの意味がある。

\*読者の方へ。本書は、手話と音声と筆談の区別を分かりやすくするために、手話の部分は「〜」で、音声の部分は「」で、筆談は《》で表しています（メールも）。二種類を併用している場合は、「〜」のように組み合わせています。

## 第1章 夢の始まり

夏空に、セミの声が響き渡る。

平子瑞月は、空に浮かび上がるように建つ建物を見上げた。日本保健医科大学病院、大学も併せ持つ大きな病院だ。今日は、この病院の看護師の桑野まゆに呼ばれてきたのだ。

病院に足を踏み入れると、瑞月の足は自然と速くなる。妹のはるひの言葉を思い出した。

〈廊下を歩く時ってね、足元がキュピキュピって音を出すんだよ〉

瑞月の頭にキュピキュピ……という文字が浮かぶ。でも、それだけだ。どんな音なのか瑞月にはわからない。瑞月は耳がまったく聞こえないのだ。

向かいを歩く看護師が怖い顔で瑞月を見た。瑞月はあわてて頭を下げた。それでも、急がずにはいられなかった。今日は、生まれて間もない赤ちゃんに会えるのだ。きつと小さくてむっちりしていて、天使のようかわいいにちがいない。がまんでき

ずに、瑞月は走り出してしまった。

「病院では走らないでくださいー！」

看護師の声が廊下に響く。瑞月は振り向かず走り続けた。声は瑞月には届いていなかった。

ナースステーションまで来ると、瑞月は足を止めた。まゆの姿が見える。白衣をきりつと着こなし、手にはカルテをかかえている。真剣な顔で師長と話しているところだった。瑞月の口からため息がもれた。

(かっこいいなあ)

桑野まゆは、瑞月のあこがれで、理想の看護師だ。まゆが瑞月に気づいた。笑顔で手を振ってくる。瑞月も笑顔で手を振り返した。まゆが、廊下の向こうを指差す。赤ちゃんは、あっちにいるらしい。瑞月は大きくうなずいて、まゆに近づいていっ

た。

まゆから瑞月にメールが来たのは、一週間前のことだった。

《瑞月ちゃん、ちよつと病院に来てみない？　かわいい赤ちゃんが生まれたよ》

瑞月はすぐに返信しようとした。でも、その後のメールの文字を見て、指の動きが止まった。

《その赤ちゃん、耳が聞こえないの》

耳が聞こえない……。瑞月と同じだ。同じ、ろう者だ。瑞月は、素早く指を動かした。

《もちろん行く！》

返ってきたメールには、《待ってるね》という言葉と一緒にスマイルマークがついていた。

まゆと初めて会ったのは五年前、瑞月が中二の時だった。学校で陸上部に入っていた瑞月は、毎日練習に明け暮れていた。大会に向けていつもよりもハードな練習をしていた時だ。突然、左足に激痛が走った。病院でついた診断名はアキレス腱断裂だった。

瑞月にとって、初めての手術と入院が待っていた。不安だらけな上に、目の前にコミュニケーションの問題が立ちふさがった。瑞月は、普段は手話でコミュニケーションをとっている。でも、病院には手話のわかる人がいなかった。どんな手術なのか、治療やリハビリはどうなるのか。わからないことばかりで泣きたくなくなった。そんな時、まゆが担当看護師として瑞月の病室にやってきたのだ。そして、手話で話しかけてくれた。

《大丈夫だよ》